三重・愛知県境地域における方言の接触と変容

吉田健二　赤塚奈津美　伊藤圭佑　黄地まどか　大西恵梨
大橋里帆　國本悠生　暮石朱夏　佐藤汐里　鈴村花澄
園田聖　高屋真悠子　武川奈美　中西恭介　山田晃平

1．はじめに：本年度調査の目的

本稿は、愛知淑徳大学文学部国文学科の「国語学演習」を履修する学生 14 名と担当教員の吉田が 2015 年度に実施した言語調査の報告である。三重北部地域は、名古屋を中心とする経済・文化圏とのかかわりがつよまり、言語的にも中京圏の一部となりつつある傾向が指摘されることがあった（鏡味明克 2003）。アクセントについて愛知県に隣接する地域に東京式への変化が報告されており、この観察をうらづける（岸江信介・村田真美 2012、竹内はるか 2015）。いっぽう、三重県亀山市～桑名市における 2014 年調査（吉田健二・他 2015）では、話者 11 名全員が京阪式アクセントを保持していることなど、三重北中部の方言が愛知からあるていどの独立性をもつことを示唆する結果がえられた。

愛知淑徳大学は名古屋市名東区および隣接する長久手市にキャンパスをもち、愛知出身・在住の学生が多数をしめるが、三重の学生もすくなくない。筆者たちは、三重の学生が大学生活でかれらの地元の方言を使用し、愛知・岐阜の学生にも一定の影響をあたえている印象をもっている。そこで本年度は、三重・愛知方言が接触する状況において、相互にどのていどの影響を、どの地域まであたえているかをさぐることを目標に、2014 年調査で未調査の三重県北部の四市町と、隣接する愛知県の二市町の言語調査を実施した。以下、２節で調査の概要をのべ、3～6 節で各項目の結果を報告する。７節で得られた知見をまとめ、今後の課題にふれる。

2．方法

2.1. 臨地調査の話者（中西）

各市町の教育委員会・生涯学習課・地域振興課等のご厚意により、表１の６市町 18 名の方に、ご自身のことばについておしえていただくことができた。調査は 2015 年９月１日～8 日に各地の庁舎内会議室をお借りして実施した。調査には著者全員が二日ずつ参加した。所要時間はおひとり１時間以内。「その地域のうまれで、少なくとも 15 歳までは当地でそだった」かつ「その後、そ

表１　話者の情報　愛知県～三重県・年齢の降順

略称	性別	年齢	生育地	出身小学校
蟹江 50	女	59	愛知県海部郡蟹江町	須西小学校
蟹江 40	女	49	愛知県海部郡蟹江町	須西小学校
蟹江 30	男	30	愛知県海部郡蟹江町	須西小学校
蟹江 20	男	26	愛知県海部郡蟹江町	蟹江小学校
弥富 50	男	57	愛知県弥富市	大藤小学校
弥富 40	男	48	愛知県弥富市	桜小学校
弥富 30	男	39	愛知県弥富市	大藤小学校
弥富 20	男	28	愛知県弥富市	大藤小学校
木曽岬 50	男	51	三重県桑名郡木曽岬町	木曽岬小学校
木曽岬 40	男	45	三重県桑名郡木曽岬町	木曽岬小学校
木曽岬 30	男	31	三重県桑名郡木曽岬町	木曽岬小学校
木曽岬 20	男	26	三重県桑名郡木曽岬町	木曽岬小学校
長島 50	男	51	三重県桑名市長島町	長島中部小学校
長島 40	女	41	三重県桑名市長島町	長島中部小学校
長島 30	男	36	三重県桑名市長島町	長島中部小学校
東員 40	男	44	三重県員弁郡東員町	神田小学校
川越 30	女	36	三重県三重郡川越町	川越北小学校
川越 20	女	26	三重県三重郡川越町	川越南小学校

の地域をはなれていたとしても、その期間が10年以内」という条件で、20代から50代までそれぞれ一名ずつを目標とした。以下、地名と年代をくみあわせて蟹江50、蟹江40のようによぶ。話者は全員、市町の職員である。地域言語にたいする代表性に問題が生ずるおそれがあるが、2014年調査も9/11人が公務員であり、話者の社会的条件が比較的均一になる利点もある。

2.2. 調査項目の概要とそれぞれの目的

筆者たちが提案した項目と、2014年度調査に参加した現4年生の卒業論文調査項目とをあわせ、調査票を作成した。学校語彙（3.1節）や気づきにくい方言（3.2節）は、愛知側に分布が確認されている事象で、「やんか」の機能（4.2節）、京阪式アクセントの変化（5.1、5.2節）、複合語アクセント（5.3節）は三重側に分布する事象である。それぞれ、三重北部、愛知県西部にどのていど受容されているかをさぐることがおもな目的である。また、接触による新形（4.1節）はおなじ意味・機能をもつ愛知・三重双方の言語項目の混種の存否をさぐることが目的である。一部の項目（3.1、3.2、3.5、4.2節）について、臨地調査の範囲外における状況をさぐるため、質問紙調査により岐阜東南地域在住の24～60歳の社会人18名（岐阜県中津川市・恵那市・瑞浪市・土岐市・多治見市）、愛知淑徳大学の1年生23名（愛知県豊川市～稲沢市21名、岐阜県高山市・中津川市 各1名、三重県桑名市1名）からも回答をえた。

3．結果1　語彙

3.1. 学校語彙（鈴村・高屋・武川）

語彙項目については、おもに小学校で習得するとおもわれる、学校生活にかかわる語をしらべた。学校単位でことなる語がつかわれることもあるため、かよっていた小学校もたずねた。「漢字ドリル」「上履き」は山田敏弘（2007）でも調査されているが、本調査と地域的にかさなるのは弥富市のみで、山田調査のさらに南の地域の状況を確認したことになる。

3.1.1. 「漢字ドリル」「計算ドリル」

小学校の補助教材に「漢字ドリル・計算ドリル」がある。筆者（鈴村・高屋・

表２　漢字ドリル・計算ドリル

○　カンド　　●　カド　　◎　カンドリ　—　カンジドリル
×　そのほか　　NA　知らない

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			—(×)	—	—	—
40	NA		○	×	×	○
30		○	—(×)	—	×	—
20		—(×)		—(×)	○	—

武川）のかよった小学校ではこれを「カンド・ケード」と略してよんだ。また、実習先の小学校ではさらに略し「カド・ケド」とよんでいた。そこで、この教材を略称でよぶか、またどこまで短縮するか、実物の画像を提示し、候補語をしめして使用をたずねた。結果を表２にしめす。

略さず「カンジドリル・ケーサンドリル」という話者がおおい。また、おなじ出身小学校でもことなる回答がえられることがすくなくない。たとえば長島は全員おなじ小学校出身だが長島 40 のみカンド・ケード。蟹江 30、蟹江 40、蟹江 50 もおなじ小学校だが、やはり蟹江 40 のみカンド・ケードである。川越 30、川越 20 はずっと三重に居住しているがことなる回答、など個人によることなりがめだち、はっきりした世代差・地域差がみいだせない。なお、「そのほか」は「漢字ドリル・計算ドリル」を総称してドリルというケースである。また、質問紙調査ではもっとも短縮した「カド・ケド」は岐阜県に隣接する一宮市までだった。

山田（2007：31）は、「カド・ケド」は岐阜を中心に分布し、より長い「カンド・ケード」「カンドリ・ケードリ」はその南に分布することなどから、略称の使用は岐阜にはじまり、教員研修などをつうじて隣接地に伝播したと推測している。今回の調査で、さらにその南にも、略称の使用が、「カンド・ケード」にかぎって伝播しているらしいことがわかった。

3.1.2.「上履き」

学校の校舎内でもちいる靴の名称もしらべた。写真を提示し、使用語形をたずねた。「ウワバキ」「ウワグツ」がおおいと予想し、このふたつについては誘

表３　「上履き」

●　ウワバキ　□　ウワグツ　△　バレーシューズ　×　そのほか

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			●(□)	×	●	●
40	●(×)		●(△)	×	●	●
30		□	●	●(×)	●	●
20		●		●	△	●

導質問もおこなった。結果を表３にしめす。

山田（2007）における愛知県西南部はウワバキがおおいが、隣接する愛知西南端～三重東部でもウワバキが優勢なようである。いっぽう三重側には、このウワバキとほかの語との併用がめだつ。山田調査で一宮市、稲沢市にみられたバレーシューズが弥富 20、長島 40 からえられ、弥富 30、弥富 40 もバレーシューズは文字では目にすると回答した。またウワグツも長島 50、川越 30 からえられ、ウワバキ、ウワグツがまとまった排他的な分布領域をもつ傾向がよわいことがうらづけられた。山田（2007：33）は岐阜・愛知におけるウワバキ、ウワグツの、このようなやや錯綜した分布について、ものの同定さえできればよく、こうよばなければいけないという根拠がよわいため、複数の語形が併存し、その状況に問題がかんじられないためだと推定している。

「そのほか」のうち木曽岬 30 は、山田（2007）では岐阜県各務原市、愛知県安城市と、はなれた２地点のみのシューズ。東員 40 は山田（2007）にはみられないズックをウワバキの併用語形としてこたえた。この二変種のような、学校で使用することの含意がない、いわば一般的な呼称が、地域的に連続しない地点からえられたことは、学童期以降、この語（もの）にふれる頻度がさがることにより語形の記憶が不安定になることが要因のひとつだとかんがえられる（井上史雄 1977：95）。

3.1.3. 通学区域

小中学校の通学区域をあらわすことばに「学区」と「校区」がある。おなじ概念をさす語であり、佐藤亮一（2009：158）によれば、東日本で「学区」西日本では「校区」（石川県で「校下」）とよばれるという。今回の調査地、三重北

表４　通学区域の呼称

●　ガック　　▲　コーク　×　語なし

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			▲(×)	×	●	▲
40	▲(×)		▲	×	●	●
30		●	▲	×	●	●
20		▲		●	●	●

部～愛知西部にこの東西対立分布の境界がある可能性がある。そこで調査では、小中学校の通学区域を何というかたずね、「ガック」「コーク」のいずれかがえられたばあい、もういっぽうを耳にするかどうかもたずねた。結果を表４にしめす。

概略、木曽岬町と長島町を境にガックからコークにきりかわる。明瞭な世代差はみとめられない。ただし、木曽岬町は「通学区域をあらわす語がない（知らない）（×）」という回答がおおい。木曽岬町には小中学校が１校ずつしかないため、という説明が木曾岬 40 と木曾岬 50 からえられた。木曽岬 20 のガックを重視すれば、三重・愛知県境ではなく木曽川を境界と判断することになる。

3.1.4. 朝礼台

2014 年度調査で、学校の校庭などに設置する「朝礼台」を「指令台」というかどうか調査したが、三重北中部ではまったくつかわれていなかった。今年度もひきつづき調査をおこなったが、愛知県西をふくむ 18 名からも「指令台」はえられなかった。そこで、さらに質問紙調査により愛知西部・岐阜南部の 41 名からもデータをえた（2.2 節参照）。調査方法は、写真で実物をみせ、「朝礼台」「指令台」の使用をたずねるものである。図１に 2014･2015 年度調査の結果と、さらに筆者のうち愛知県生育のものが使用する語形もあわせてしめす。紙幅の都合上、「指令台」がみられた愛知県のみとする。

「指令台」がみられるのは、名古屋市と近隣の東郷町・稲沢市・一宮市・大口町で、「指令台」専用は名古屋市の北部におおい。このあたりからこの語形がひろがりはじめた可能性がかんがえられる。愛知県東部や西三河地域、知多地域、岐阜県からは「指令台」はえられなかった。「指令台」がもちいられているのは、

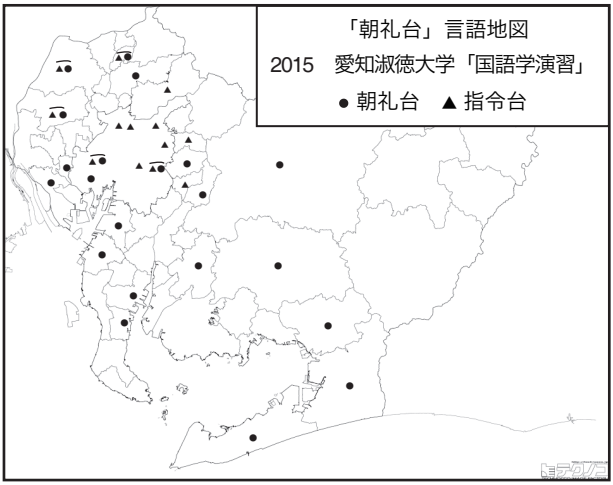

図１　「朝礼台」の分布（愛知県のみ：2014、2015 年度・質問紙調査をふくむ）
白地図提供：テクノコ白地図　http://technocco.jp

愛知県西部の名古屋を中心としたせまい地域であり、いまのところ愛知県内の他地域や三重県、岐阜県にはおよんでいないのだとおもわれる。

3.2. 気づきにくい方言語彙「おぼわる」（柴田・吉田）

「おぼわる」は他動詞「おぼえる」に対応する自動詞で、「かわる・かえる」などとおなじ、もっとも語数のおおい形態的対応だが（寺村秀夫 1982：309）、共通語には自動詞がない。しかし、岐阜東南部では「たし算がおぼわらん」のように、学校の学習内容などについてさかんにつかわれており、方言意識をもたれにくい可能性がかんがえられる。「おぼえる」に対応する自動詞の欠如が意味特徴にもとづく原理的なものか、方言によってはおぎなわれる可能性をもつ「偶然のあきま」か、ということに示唆をあたえうる現象だとおもわれる。方言意識もふくめた調査結果はべつにのべる（柴田彩花 2015）こととし、ここでは使用状況についてのみ報告する。

自動詞がないケースで自発・可能の意味をあらわしたいばあい、「受身がその役をする」（寺村 1982：318）ことがあり、「おぼえる」にも「おぼえ（ら）れる」がある。おそらくおなじ理由で、「おぼわる」にも自発的な含意があるとかんが

表５　「おぼわらん」の使用

出身・生育	三重			愛知			岐阜		
対象	使う	聞く	しらない	使う	聞く	しらない	使う	聞く	しらない
友人の顔	6	5	0	45	8	3	13	5	2
英単語	4	5	2	41	9	5	13	6	1

えられるが、安藤智子（2015）は「おぼえられる」が記憶に多少努力を要した状況についてもちいられるのにたいして、「おぼわる」は自然と記憶した状況でもちいられると内省する。そこでこの調査でも、おぼえる対象として「あたらしい友達の顔が、まだおぼわらん」「あたらしい英単語が、まだおぼわらん」のふたつの否定形の文をしめし、「おぼわらん」の使用をたずねた。上記の記述にしたがえば、「友達の顔」がより自然な記憶であり「おぼわる」がよりつかわれやすいと予測される。柴田個人の調査と質問紙調査の結果もあわせて、東海３県以外で生育した１名をのぞいた 87 名の回答を表５にしめす。

三県とも「使う」がみられるが、愛知がとくにおおく、岐阜がつづく。ことに愛知県は、「友人の顔」について学生が全員「使う」だった。いっぽう、三重は「使う」と「聞く」が均衡しており、愛知・岐阜でより有力だとみられる。おぼえる対象については、若干「友人の顔」のほうが「使う」がおおく、「しらない」がすくない、という傾向にとどまる。いずれの県についても、統計的に有意な差はみとめられない（符号検定：$p > 0.4$）。「おぼわらん」をつかうとした話者も、どちらの調査文についても「おぼえ（ら）れん」もいう、とする話者がひじょうにおおい。調査文や調査方法が不十分だった可能性ものこるが、おぼえる対象をしめせば、確実に「おぼわらん」「おぼえられん」のいずれかにきまる、というほどの明瞭な使い分けはないようである。

４．結果２　語法

4.1. 接触による新形（國本・園田・中西）

ことなる言語をはなすひとびとが交流し、会話する可能性がある場所には、言語接触が生ずるとかんがえられる。そこでは、同一文脈にあらわれ、おなじ

ものごとを指示する、語形がことなる単語どうしの混交形がうまれることがありうる。愛知と三重との県境には、日本語のおおきな方言境界があり（加藤正信 1977）、さまざまな言語接触が生じているとかんがえられる。本節では、この県境付近での混交形の発生と、三重・愛知両県の方言の他方への侵入の様相をとらえることをねらいとした調査の結果を報告する。

4.1.1. 順接の接続形式「だから」

筆者（國本）の友人の三重県出身の男性は、「だから」の意味の接続形式に「せやもんで」をつかう。これを関西の「せやから」と、愛知の「だもんで」の混交形ではないかとかんがえ、それがじっさいにもちいられているかどうかを確認するため、また、「だから」の意味の接続形式の三重・愛知それぞれの方言形の分布状況と、接触による隣接地域への侵入の可能性をさぐるための調査をおこなった。「水族館に行ったら休館だった。だから、買い物して帰ってきたんだ。」という標準語文を提示し、「だから」の部分をふだんどのようにいうかたずねた。「せやもんで」については誘導質問もおこなった。

表６にまず自由回答の結果をしめす。丸記号（●○◎）でしめした断定辞「ダ」をもつ形式は愛知側に分布する。『方言文法全国地図』（以下、「GAJ」）36・37図「子ども［な］［ので］分からなかった」によると、ダデ、ダモンデは愛知以東に分布し、三重側には三角記号（△▲▽▼）でしめした断定辞「ヤ」をふくむヤデが分布する。今回、両県の県境付近をこれより地点を密にして調査した結果、県境に位置する長島・木曽岬では 50 歳代からは三重側の「ヤ」をもつ語形、40 代以下からは「ダ」をもつ語形がえられた。ここから、愛知から三重側に愛知の「ダ」をもつ語形が侵入しつつあると推測される。

表６　「だから」の意味の接続形式（「せやもんで」以外）

●　ダデ　　◎　ダモンデ　　○　ダカラ　　▲　ヤデ
△　ソンヤデ　▽　セヤデ　　▼　ヤッタカラ

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			▲	△	●	◎
40	▽		◎	●	●	○
30		▲	○	◎	●	●
20		▼		○	●	○

表７　「せやもんで」の使用

●　使う　　△　聞く　　×　使わない

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			×	△	△	×
40	●		△	△	△	△
30		×	△	△	△	×
20		△		×	△	△

つぎに、「せやもんで」の使用調査の結果を表７にしめす。「せやもんで」を「聞く」はおおいが、「使う」は東員 40 のみだった。調査の企画の時点では、「せやもんで」を三重・愛知方言の混交形とかんがえたが、GAJ36・37 図によれば、三重県松坂市、飯南郡飯高町（現松坂市）にヤモンデがあり、東員 40 のセヤモンデもこれよりはかなり北ながら、三重独自の方言形式を反映したものかもしれない。

いっぽう、川越から蟹江にいたるまで「聞く」がおおいのはやや疑問である。この地域に「使う」がいないということは、聞く機会がえられる可能性もひくいはずだからである。この「聞く」のおおさはむしろ、表６にみられるヤデ、セヤデ、ダモンデにささえられたものかもしれない。「せやもんで」そのものは聞いたことがなくても、その構成要素なら頻繁に耳にするため、それを組み合わせた「せやもんで」も可能な気がする、ということである。この推測が当を得たものだとすれば、すくなくともこの地域で「せやもんで」という混交形が成立しうる素地は存在するということになるのかもしれない。今後のこの地域の接続形式の変化の動向をさらに追う必要がある。

4.1.2. 動詞「する」の禁止形

つぎに、動詞「する」の禁止形をとりあげる。この意味・機能で「せんすな」が三重県松坂市、多気郡大台町、度会郡大紀町で使用され、いっぽう伊勢市ではつうじないらしい（國本の友人からの情報）。GAJ には「する」の禁止形はなく、221・223 図に「行く」の禁止形「（やさしく / きびしく）そっちへ［行くな］」がある。三重は北部にイクトアカン、イクナ、中部にイカントキ、南部にイ（ッ）タラアカンがみられる。中部のイカントキが「する」の禁止形セントキに、イ

クナがスナに対応するとおもわれる。また、動詞「する」の否定形はGAJ84図で、愛知、三重ともにセンが優勢である。これに、関西一般の禁止形スナがさらに付加されたものがセンスナだとかんがえられれる。

今回の調査では、「せんすな」にくわえて、「せんで」の使用も調査した。また、これらを使用しないばあい、「する」の禁止形にどのような語を使用しているかをたずねた。その結果、「せんすな」は川越30が「聞く」と回答したほかは全員「知らない」だった。そこで、まず表8に「せんで」の使用についての回答をしめす。「使う」は愛知側にかたよっており、「聞く」をふくめてもその傾向がうかがえる。

つぎに、「せんで」以外の自由回答の結果を表9にしめす。まず否定をあらわす前部要素をみると、丸記号（●○◎）でしめしたシヤンをもつ語形は三重よりに木曽岬までみられる。いっぽう愛知側は、シン（▲△）をもつ語形がおおい。表8でやや愛知側で優勢だったセンをふくむセントイテ（■）は、三重側

表8　「する」の禁止形としての「せんで」の使用

●　使う　　△　聞く　　×　使わない

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			×	×	△	△
40	×		●	●	△	△
30		△	△	△	△	●
20		×		△	●	●

表9　「する」の禁止形（「せんで」以外）

●　シヤントイテ　　○　シヤンデ　　◎　シヤンノ
■　セントイテ　　▲　シントイテ　　△　シンデ
—　スルナ　　＝　シヤースナ

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			—	●	■	▲＝
40	■●		○	▲	▲	▲
30		■	●	▲	▲	—
20		◎		○	△—	—

の東員 40、川越 20 と、弥富 50 のみだった。

つぎに、禁止形の後部要素をみる。ぬりつぶし記号（●■▲）でしめしたトイテは、すべての地域で 20 歳代以外にみられる。横棒（—＝）でしめした「ナ」は愛知側にかたよる。白ぬき記号（○△）の「デ」は長島〜弥富にみられ、表８のセンデの使用域と矛盾しない。

データ量がじゅうぶんではなく、上述のように、複数の形式がかならずしも傾向がはっきりしない分布をしめしているため、明確なみとおしをたてることがむずかしいが、今回えられたデータの範囲で二点指摘しておきたい。ひとつめは前部要素の否定形式についてである。GAJ84 図の「する」の否定形では愛知･三重ともセンが優勢だが､これは 1925 年以前うまれの話者のデータである。表９の分布は、三重ではシヤン、愛知ではシンが、本調査の時点でより有力な形式となりつつあることを示唆する。ヤンによる（非五段活用）動詞の否定形については、関西中央部でも勢力を得つつあり、それが、その変化が先行した三重からの伝播によるものである可能性が論じられている（日高水穂 2014、鳥谷善史 2015、太田有多子 2013 も参照）。この点については、昨年度の調査にもとづき、三重北中部では GAJ の段階にくらべてサ変・カ変動詞や長い動詞にもヤンの否定形が定着していることを報告した（吉田・他 2015）。本年度もさらに項目をふやした調査をおこない、結果はべつに報告する予定である（清水未希 2015）。愛知側のシンはサ変動詞「する」の一段活用化を示唆するが、GAJ84 図で愛知にラ行五段活用への変化を示唆するシランがみられ、ここからのシンへの回帰の可能性もかんがえられる。また、標準語否定形の「しない」の影響による形成過程をへたものである可能性もかんがえられる（真田信治 1987）。表９の禁止形前部要素の分布傾向は、三重・愛知の否定形のこのような変化を反映したものだとおもわれる。

ふたつめは、表８のセンデの愛知側へのかたよりの理由である。表９で愛知側で否定形にセンではなくシンが優勢になりつつあること､三重側にはセン（トイテ）があることをかんがえると、センデそのものの使用をあらわすというより、禁止形末尾に「デ」を許容するか否かに反応した結果である可能性があるようにおもわれる。三重側にいくほど「デ」でおわる禁止形が許容されにくくなる、ということである。以上の推察がただしいとすれば、表９の長島 30、木

曽岬 20 のシヤンデは、分布域からかんがえても、三重側のシヤンと愛知側のデをくみあわせた混交形である可能性がかんがえられる。今後さらに検討したい。

4.1.3.「来ないじゃないか」

三重県長島町出身の筆者（中西）は、愛知・三重のいずれの人とはなすときにも、話し相手に違和感を表明されることがある。これは木曽川と長良川・揖斐川にはさまれ、両県の境界に位置する長島町にくらすひとびとが、両者のことばを混ぜ合わせて独自のことばをつかっているからではないかとかんがえてきた。そこで今回、そのようなことばである可能性をもつ「来ないじゃないか」について、混交形とおもわれる語形の使用をしらべた。

調査文は、友人が時間になっても来ないので、ともにまつべつの友人に「（まつ人物が）来ないじゃないか」とぼやく発話である。「来ないやん・来んじゃん・来んやん・来やんじゃん・来やんやん・来やんがー」の 6 つを提示して使用をたずねた。また、これ以外に使用する語形もたずねた。その結果、おおくの変異形について「使う」と回答があった。木曽岬 40 は 6 つすべて「使う」であった。このようなばあい、じっさいにすべてつかうわけではなく、その語形（あるいはそれにちかいもの）を聞くことがあるため、自身もつかうようにかんじ、「使う」と回答した可能性もある。この項目のようにおおくの語形が共存するばあい、候補をしめして使用をたずねる方法では、使用実態を適切にとらえられないのかもしれない。いっぽう、翻訳方式でひとつ（少数）の回答をえるのでは、併用の状況をじゅうぶんとらえられないおそれもある。結果を表 10 に、「使う」をさきに、「聞く」をそのあとに（　）に入れてしめす。語形がおおいため表 10-1、表 10-2 にわける。なお、自由回答でコヤンネ（ー）もえられたが、「じゃないか」にあたる要素がないので、分析対象からはずす。

表 10-1 には前部要素に「コン」「コナイ」をもつ語形をしめした。やや愛知側にかたよるが、ほとんどの地域にみられる。しかし、三重のうち東員、川越には少数の変異形（文末詞がヤンのもの）しかみられないのにたいして、愛知にちかい長島・木曽岬にはおおくの変異形がみられる。コンジャン（●）、コンガー（◎）は長島までにしかみられず、「ジャン」「ガー」がおもに愛知側に分布することをうらづける。コナイヤンは「聞く」もふくめて全地域にみられ、

表 10-1 「来ないじゃないか」(1) コン-、コナイ-系

提示した語形 □ コナイヤン ● コンジャン ○ コンヤン

自由回答でえられた語形 ◎ コンガー ◉ コンジャナイ

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			(□○)	□ (●○)	◎ (□●○)	(●)
40	○		(□○)	□●○	◎ (□)	●
30		□	◎ (□●○)	●◉ (□○)	◎ (□)	●◎ (□○)
20				○ (□●)	●◎ (□○)	□●○◎

表 10-2 「来ないじゃないか」(2) コヤン-、コヤヘン-系

提示した語形 ▲ コヤンジャン △ コヤンヤン（カ） ▽ コヤンガー

自由回答でえられた語形

▷ コヤンガヤ ☆ コヤヘンジャン ★ コヤヘンガー

年齢	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			△ (▽)			
40	△		▷ (▲△)	▲△▽		☆
30		△ (▲)	▽ (▲)	▲		(▲)
20		△		▲△▽★		(▲△▽)

文末詞「ヤン」が三重・愛知両県でつかわれることもしめす。表 10-2 には「コヤン」「コヤヘン」を前部要素にもつ語形をしめした。コヤン系は三重側に分布がかたよるようであり、蟹江に「聞く」がみられるものの、弥富にはまったくみられず、「使う」は木曽岬までである。これは前節表 9 の「する」の禁止形におけるシヤン系の分布とおなじである。また、表 10-1 とおなじく、三重でも愛知にちかい長島・木曽岬に多数の変異形がみられる。

総合すると、愛知側で勢力のつよい変異形と、三重側で勢力のつよい変異形がであうのが長島・木曽岬あたりらしいことがわかる。木曽岬は三重県で唯一、木曽川の東岸に位置し、通学の便のため愛知側の高校に入学するケースが大半であるなど、愛知とのつながりがつよい。しかし、前節でもみたとおり、三重で勢力を拡大してきたヤンの否定形が分布する点は、この地が三重の言語圏の一部で（も）あることを示唆する。またいっぽう、この地の話者は動詞「する」の否定形シンや文末詞ジャン、ガーのような愛知で有力な形式も受容している。

以上をふまえると、表 10-2 で木曽岬 40、木曽岬 20、長島 30 が「使う」としたコヤンガーが注目される。三重の「ヤン」に愛知の「ガー」が接したものであり、両県の方言形が接触したこの地でうまれた混交形だとおもわれる。これは使用をたずねる調査の結果ではあるが、筆者（中西）がじっさいに使い、長島での使用も聞く。じっさいの使用を反映した結果とかんがえてよいとおもわれる。

4.1.4. まとめ

本節では三つの文法形式について混交形の分布を検討した。その結果、筆者たちが個人的に情報をえた変異形のうち、「せんすな」「せやもんで」は存在が確認できなかったが、筆者（中西）が使用する変異形コヤンガーは県境に使用が確認できた。また、三重・愛知両県でそれぞれ優勢な方言形式の他方の地域への侵入については、以下のような状況をみいだすことができた。

断定辞「ダ」　：愛知→長島まで（表 6 ）
否定の「ヤン」：三重→木曽岬まで（表 9・表 10-2）
文末詞「ガー」：愛知→長島まで（表 10-1）

三重県最東部の長島・木曽岬で愛知・三重のさまざまな方言形式が接触していること、複数の形式が受容され、併存する状態にあることがうかがえた。さらに、禁止形のシヤンデ、「来ないじゃないか」の意味のコヤンガーという、両地域から勢力をのばしてきた形式をくみあわせたかとおもわれる変異形がみられた。高橋（2008：107）は、言語接触について、伝播する側、受信する側の力がほぼ均衡しているばあいにかぎって、あらたな変異がうみだされるという仮説を提示している。これにかんがみると、両方向からの変異形の侵入があり、そこで両者の混交形が発生している、またはそれがうけいれられそうな素地がみいだせるという点で、三重・愛知の両方言については、かならずしもいっぽうの勢力が圧倒している状況ではないというみとおしがえられる。

4.2. 方言形式「やんか」の語用論的機能（赤塚・黄地・大西・大橋）

三重県には、「やんか」と「んやんか」という、「ん」の有無のみによって区

別される二種の文末詞がある。佐藤虎男（1990：5）によれば、「やんか」は近畿圏に分布し、大阪方言における機能は、相手にたいして同感（共通理解）をもとめることである。三重における「やんか」と「んやんか」のちがいのひとつが、言及することがらが話し相手も共有する情報かどうかで、たとえば「行ったやんか」は、「行った」ことを話し相手に確認させるためにつかうことができる（以下、「確認」用法とよぶ）。高木千恵（2006：113）が「認識の再形成」とよぶ用法とおなじだとおもわれる。いっぽう「行ったんやんか」は、「行った」ことを知らない相手にその件をもちだすときにつかえる（以下、「報告」用法）。しかし赤塚（三重県津市生育・在住）以外の筆者（愛知・岐阜）は、「報告」の「んやんか」を聞いて、その機能を知らないため、自分が知っている前提で知らない話をはじめられたような違和感をおぼえた経験がある。

そこで、確認と報告の表現について、三重から愛知にいたる地域のどこまでで三重タイプのつかいわけを使用・理解しているのかさぐることをねらいとして、⑴の３つの調査文を作成した。(ⅰ)は「確認」用法で、友人Ａと伊勢に行き、それをＡとふりかえる、したがって伊勢行きの件は話者とＡの共有知識というケースで、三重なら「行ったやんか」が予測される。(ⅱ)と(ⅲ)は「報告」用法で、友人Ａと伊勢に行ったことをべつの友人Ｂに話す、したがってＢは伊勢行きの知識を共有していないケース。赤塚の内省にもとづき、「報告」の「行ったんやんか」がもちいられるのは、報告のあとに比較的想定内のできごとがつづくばあいで、これにたいして、おもいがけないできごとがつづくばあい、「行ったんやんか」も可能だが「行ったんやけどさ」のほうがより適切、という仮説をたてた。そこで、それぞれをしめす文脈をくわえたのが(ⅱ)(ⅲ)である。調査では、調査文の下線部に使用する形式の候補として、⑵の６つをあげ、使用度をたずねた。右の（　）にしめしたように、三重・愛知・岐阜の典型とおもわれる形式をそろえてある。

⑴　調査文

(ⅰ)（伊勢にいっしょに行った）友人Ａに

先月、伊勢に<u>行ったでしょう</u>？　そのとき、赤福氷食べたよね（確認）

(ⅱ)（伊勢行きの件を知らない）友人Ｂに

先月、伊勢に行ったんだよ（行ったのよ）、そうしたらやっぱり暑くてね……
（報告＋後続のできごとが想定内）

(iii)（伊勢行きの件を知らない）友人Ｂに

先月、伊勢に行ったんだよ（行ったのよ）、せっかく行ったのにあいにく雨でね……（報告＋後続のできごとが想定外）

(2) 選択肢（予想される使用地域／機能）

a. 行ったやんか　（三重／確認）
b. 行ったんやんか　（三重／報告＋想定内）
c. 行ったじゃんか　（愛知／岐阜・確認）
d. 行ったんや（だ）けどさ　（三重・岐阜・愛知／報告＋想定外）
e. 行ったらー　（岐阜／確認）
f. 行ったんや（だ）て　（岐阜・愛知／報告＋想定内）

表11のように、話者ごとに3つの調査文をたてに、三重の形式a、b、dをよこにならべて使用情報を記号でしめす。予測どおりの形式がもちいられたばあい、この例のように、ななめに○（使う）がならび、ほかは×（知らない）または―（使用不可能）になる。ただし、「報告」用法について、あとにつづく内容が想定内か想定外かによって「んやんか」「んやけど」がつかいわけられると予測したが、そのようなつかいわけはみいだせなかった。川越20から「んやんか」「んやけど」は伝えたいきもちのつよさによってつかいわける、という内省がえらており、この二形式のちがいについては再検討が必要である。ここでは、「報告」表現のあとにつづく文が想定内、想定外にかかわらず、「報告」表現とあつかい、「確認」と「報告」とがべつの形式で区別されているかどうかのみに

表11　各話者の3×3の結果の表示　○：使う　×：使わない・知らない

調査文	やんか	んやんか	んやけど(さ)
(i) 確認	○	×	×
(ii) 報告・想定内	×	○	×（○）
(iii) 報告・想定外	×	×（○）	○

注目し、(i)に「やんか」が、(ii)(iii)の文のいずれかに「んやんか」「んやけどさ」がもちいられていれば両用法の区別があると判断する。したがって、(○) のセルも「使う」が予想される。

結果は表 12 のようになった。東員 40、川越 30、川越 20、長島 40、木曽岬 50 は「確認」は「やんか」、「報告は「んやんか」または「んやけど」とあきらかな区別があり、まぎれることがない。表では濃いグレーでしめした。また、長島 30 は「やんか」と「確認」の対応ははっきりしないが、「んやんか」「んやけど」と「報告」の対応は明確。木曽岬 30 は、聞く（△）という反応をふくむものの、「確認」が「やんか」、「報告」が「んやんか」でまぎれない。長島 50 は「確認」にはいずれの表現ももちいない（「行ってきたときになー」と回答）が、「報告」はもっぱら「んやんか」をもちいる。この三者は、濃いグレーでしめした話者に準ずるものとして、うすいグレーでしめした。弥富 20 は、「報告」が「んやんか」専用で長島 50 と似るが、「んやけど」を「確認」「報告」の両方で聞くとこたえているので、両機能の区別をもつか不明である。

表 12 「確認」「報告」表現の使用と理解（三重の形式のみ）
○：使う　△：聞いたことがある　×：知らない　－：不可能

年代	東員	川越	長島	木曽岬	弥富	蟹江
50			××× ×○× ×○×	○×× ×○△ ×○△	△×△ △○△ △○△	△×○ ×○× ×××
40	○—— —○× —○×		○×× —○○ ——○	○○× ×○○ ×○×	△△△ △○△ △○△	△△△ ×△△ ×△△
30		○×× ×○○ ×○○	△×× ×○○ △○○	△×× ×○× ×△×	△△△ △△△ △△△	△○× ×○× △○×
20		○×× ××○ ×○×		△△△ △△△ △△△	——△ ×○△ —○—	△△△ ×○△ ×○△

いっぽう、木曽岬 20、弥富 30 は、いずれの用法でも、いずれの語形も聞いたことがあると回答しており、「確認」「報告」の機能に対応した形式の区別がうかがえない。弥富 30、弥富 40、弥富 50、蟹江 40 もこれにちかい。蟹江 30 はす

べてで「んやんか」をつかうとこたえるなど、そのほかの蟹江の話者にも、「確認」「報告」の区別を示唆する回答傾向は指摘しがたい。質問紙による追加調査では選択肢をしめさず、下線部を各人の方言にいいかえてもらう方法をとったが、岐阜と愛知の 34 人に「やんか」はみられず、「やんか」が三重の事象であるということが確認できた。

以上をまとめると、グレーでしめした「報告」「確認」のつかいわけがみられるのは三重側のひとたちで、木曽川の対岸に位置し、愛知県とのつながりがつよい木曽岬町にも、年齢の高い話者については区別の傾向がみられる。いっぽう、隣接する愛知県西端にも「やんか」は伝播しているものの、意味と対応した区別の習得にまではいたっていないことがうかがえる。

5．結果３　アクセント

5.1.　２拍名詞 IV・V 類のアクセント：合流と東京式アクセント化（吉田）

2014 年調査につづき、いわゆる類別語彙２拍名詞 IV・V 類のアクセント型の合流変化の調査を実施した。前年と本年の結果を統一できるよう、調査語・方法とも前回とおなじとした。調査語は IV・V 類名詞、それぞれ６語ずつ（海・帯・苗・肌・船・罠／雨・猿・窓・春・鮒・蛇）、発話条件は「A 助詞あり」「B 助詞なし」「C 助詞なし・強調あり」の三種である。詳細は吉田・他（2015：132）を参照されたい。今回の話者は、愛知県および揖斐川以東の三重県の話者が 15/18 人と大半を占めたが、先行研究から予想されるとおり調査語すべてを頭高型で発音し、そのほかの発話からも東京式アクセントと判断された。したがって詳細は東員 40、川越 30、川越 20 についてのみ、また紙幅の都合で語ごとではなく、音調型の出現数のみを報告する（表 13）。音調型の H は高い拍、L は低い拍をあらわす。各セルはその音調型がみられた数で、二回発話がえられた東員 40、川越 20 は３つの音調型の合計が 12、川越 30 は一回発話で合計が６になる（録音もれなどでそれより少ないケースがある）。太字でしめした音調型が伝統的京阪式の音調型であり、東京式なら IV・V 類友 HL(L)型になる。

川越 30、川越 20 は HL 型が大半を占め、東京式の獲得がすすんでいることをうかがわせる。いっぽう、東員 40 は条件 A では東京式がおおいが、条件 B、

表 13　２拍名詞 IV・V 類　アクセント　京阪式話者のみ

話者	調査語	音調型	A 助詞あり	B 助詞なし	C 強調
東員 40	IV 類	HL(L)型	7	5	2
		LL(H)～LH(H)型	5	6	10
		LH(L)型	0	0	0
	V 類	HL(L)型	7	2	1
		LL(H)～LH(H)型	1	10	11
		LH(L)型	4	0	0
川越 30	IV 類	HL(L)型	6	6	5
		LL(H)～LH(H)型	0	0	0
		LH(L)型	0	0	1
	V 類	HL(L)型	6	6	6
		LL(H)～LH(H)型	0	0	0
		LH(L)型	0	0	0
川越 20	IV 類	HL(L)型	10	12	9
		LL(H)～LH(H)型	2	0	0
		LH(L)型	0	0	3
	V 類	HL(L)型	10	11	6
		LL(H)～LH(H)型	2	0	0
		LH(L)型	0	0	6

条件 C とすすむにつれて、東京式ではない型がほとんどになる。京阪式の言語能力を保持していることをしめす。また、条件 B、条件 C で、東京式でなかったものはすべて伝統的京阪式の IV 類相当の LL(L～H)で、ふたつの音調型の合流がすすんでいることがわかる。しかし条件 A では IV 類に LL(L)、V 類に LH(L)のあらわれる傾向があり、合流が完了していないこともうかがえる。助詞なし（条件 B、C）で IV 類相当の音調型があらわれやすい傾向は、2014 年調査の話者にもみとめられ、郡史郎（2011）が大阪市について指摘したものと似る。いっぽう、川越 30、川越 20 には、条件 B、C をふくむすべての条件で V 類相当の LH(L)しかあらわれない。昨年度の調査ではみられなかった傾向であ

り、即断はできないが、岸江・村田（2012）が概観した、各地の京阪式における合流パターン（LH(L)型への統一）に合致しているということかもしれない。

つぎに、2014・2015年調査の結果を統合して、三重中部～愛知西端部までのIV・V類合流と東京式化の傾向を概観する（表14）。60～80歳代はいないので省略する。各セルの数値は京阪式（LL型またはLH型）の比率をしめす。たとえば、亀山の40代は全72発話中、東京式のHL型が5つでのこりの67発話がすべて京阪式のLL型またはLH型なので、京阪式の出現率が約93%となる（録音回数のちがいや、ミスによる調査もれのため、全発話数がこれよりすくない話者もいる）。その右の丸カッコ内の数字はこの67発話中、伝統的京阪式（IV類がLL、V類がLH）で発話された比率で、この話者では46/67で約69%だった。すべてIV類相当、あるいはV類相当の音調型で発話される、両者が完全に合流した状態でも伝統的な型との一致度は50%になるので、たとえば朝日の２名の54%、56%は、合流の完了にちかいことをしめす。長島以東（以北）の地域は京阪式０%なので、「伝統的京阪式の比率」は計算できない。また、全体の傾向を概観するため、発話条件によるちがいはしめさない。

桑名から長島にはいると京阪式がまったくみられなくなる。これにたいして桑名以西では京阪式をまったくしめさない話者はひとりもおらず、この点では、揖斐川という従来のアクセント体系の境界が維持されているといえる。また、東員・川越といった愛知にちかい地域の比較的わかい話者に東京式もかなりあらわれており、岸江・村田（2012）や竹内（2015）の報告する東京式の影響もうかがえる。いっぽう、桑名以西の京阪式アクセントが長島以東の東京式アクセント地域に影響をおよぼしているようすは、まったくない。また、丸カッコ

表14　2014・2015　２拍名詞IV・V類アクセント　地点×年代図
非東京式（そのうち伝統的京阪式）アクセント型による発話率（%）

年代	亀山	鈴鹿	東員	朝日	川越	桑名	長島	木曽岬	弥富	蟹江
90						81（97）				
50	100（70）	100(100)					0	0	0	0
40	93（69）	22（81）	66（77）	91（54）			0	0	0	0
30					3（0）	100（62）	0	0	0	0
20		89（59）		99（56）	18（62）			0	0	0

内の数値をみると、20〜30 代の話者がとくに伝統的京阪式との一致率が低い。LL 型と LH 型の合流が、わかい世代にむけて進行中の変化であることをうらづける。

5.2. 3〜5 モーラ名詞における式音調の音韻論的対立（吉田）

前節でみたような、京阪式におけるアクセント型対立の消失傾向はアクセント体系全体にどのていど影響をあたえるだろうか。２拍名詞だけをみれば、IV 類の LL(H)型＝低起式無核（L0）が、V 類の LH(L)型＝低起式２核（L2）に合流してうしなわれると、⑷の３つの音調型が区別されることになる。HH(H)型初頭の高さは余剰的な特徴になり、右にしめしたとおり、アクセント核の位置と有無だけで弁別されうる。「高起・低起」という式は、すくなくとも音韻論レベルでは必要なくなる可能性が生ずる。ただしこれは２拍名詞だけの個別の事情で、３拍以上の名詞や動詞などには、高い拍・低い拍が句頭から複数拍にわたってつづく、式対立の存在を示唆する音調をもつ話者がいるようである（郡 2011、2012a など）。

⑷　HH(H)型　おもに I 類　　（無核）
　　HL(L)型　おもに II・III 類　（１核）
　　LH(L)型　おもに IV・V 類　（２核）

川越 30、川越 20 や、朝日 40、朝日 20 のような、⑷の体系への変化がほぼ達成された話者について、これを契機のひとつとしてふたつの式音調のちがいもよわまり、音韻対立解消の途上にあるという可能性はあるだろうか。この問題の検討のため３拍以上の名詞のアクセントの調査を実施した。紙幅の都合上、２拍名詞で京阪式の音調型がみられた東員 40、川越 30、川越 20 についてのみ報告する。

京阪系アクセントにおける式の対立の弱化については、高起式と低起式のピッチ実現の差がちいさくなりつつあるという報告がある。しかし、とくに朗読などの場面で顕著になる、声域幅使用の世代によるちがいである可能性も示唆されており（郡 2012a：31）、個人によることなりもちいさくないとおもわれ

るので、音韻対立の弱化をしめす証拠として検証することがむずかしい。高起式無核について、若年層でより平坦な音調があらわれる傾向も指摘されているが（郡 2012b：５節）、音声実現レベルの現象であり、音韻変化にむすびつくものではない可能性もある。

そこで本稿では、式のピッチ実現にあたえる影響に、先行句の音調型に対応したちがいがみられるかどうか検討することをとおして、式音調の対立が維持されているかどうかを検討する。実験語は⑸の 3〜5 拍名詞で、中井幸比古（2002）で京都の 16 人全員が高起式無核、または低起式無核で発音した語から、ピッチ分析に適した語音構造のものを８語ずつえらんだ。長い語になるほど、低起ではなく高起式で発音されるなど、予想される音調型があらわれない可能性がおおきくなるので、４拍語をおおくした。５拍語は頻度・形態論的構造・語音構成の面で適切なものがすくないため、それぞれ１語のみ。

⑸　実験語

高起無核　祭り、名前、乗り物、ものまね、日本間、二枚目、難問、悩み事

低起無核　煮豆、マンガ、生ハム、人形、野良猫、持ち逃げ、人間、旦那さん

⑹　発話条件と予測

	先行語の音調型	実験語の音調型	予測
A	高起無核　の		式対立が顕現
B	低起２核　の	高起無核または低起無核	式対立が弱化
C	低起無核　の		式対立が強調（顕現）

これらの語を⑹の三つの発話条件においた。先行語（先行文節）は A、B、C の各音調型の３拍語に助詞「の」を付加したもの。２拍語は、上記⑷の合流によって条件がそろわないことを極力避けるため３拍語にし、「の」によるアクセント消去をさけるため、有核は低起式２核とした。先行語も、中井（2002）で京都の 16 人全員が一致する語から、実験語と意味のある連鎖をつくりうるものをえらんだ（**高起無核**：田舎　裏手　英語　形見　代わり、**低起無核**：あちら　おうち　お金　大人　おまけ　お礼　会社　漢字　こちら、**有核**：いつもうしろ　おやつ　近所　最後）。文末詞「やん」を付加し、全体で「田舎の祭り

やん」「うしろの日本間やん」のような実験文ができる。もし、式の対立があれば、A ではその差が安定して観察されることが予測される。これに対して B では、先行語のピッチ下降によるピッチレンジのせばめの影響で、両式のことなりがちいさくなるものの中和にまではいたらず、観察されることが予測される（Pierrehumbert & Beckman, 1988）。C では、ピッチの上昇性を特徴とする低起式が高起式のピッチレンジをさらに高める効果をもつため、両式の差が強調されてあらわれることが予想される（Yoshida, 2011）。いっぽう、もし式の対立が消失していれば、実験語は、式については中立の無核語となり、実験語のピッチ実現レンジに二種類のパターンがみられないことが予測される。調査時間の都合上、東員 40、川越 30 については一回のみ、川越 20 については二回の発話データを取得した。いずれについても、録音時の実験文の提示順は無作為にならべかえた。

まず聴覚印象による音調型の分類結果を報告する。川越 30 の発話データには、まれに式の判断にまようケースがあったが、どの話者についてもアクセントの有無（有核型 / 無核型）の判断にまようことはなかった。まず実験語について、表 15 に中井（2002）による京都アクセントとの対応をしめす。対角線上のセルが、京都と本調査の話者とで音調型が一致したケースである。なお、京都の無核型を有核型で発音したケースはひとつもなかった。東員 40 と川越 20 は京都で高起式の語を高起式で、低起式の語を低起式で発話したケースがおおく、川越 30 もその例が多数をしめる。また、川越 30、川越 20 については京都で低起式無核の語を高起式無核で発音したケースがその逆より圧倒的におおい。無核語が式のゆれをみせる傾向は大阪にも報告されており（郡 2012a）、この二者もその傾向に合致しているようにおもわれる。以上二点から、この三人の話者がいわゆる京阪式アクセントを保持していること、また 2 拍名詞だけをみれば消失にちかくみえる式の音韻論的対立も、語の所属が高起式にかたよる傾向はみられるものの、より長い語には維持されていることにうたがいがない。表 16 に、発話データによってえられた、先行語と実験語（N1・N2）の音調型の組み合わせをしめす。

先行語については、中井（2002）の京都アクセントとのずれはすくなく、やはりほとんど式の異同だったので、実験語における傾向を反映して、N2 ＝高

表 15　京都アクセントとの対応 N2
H0　高起式無核　　L0　低起式無核

		京都（中井 2002）	
		H0	L0
東員 40	H0	19	4
	L0	5	19
川越 30	H0	23	13
	L0	1	10
川越 20	H0	47	17
	L0	0	31

表 16　N1-N2 アクセント連鎖
H0、L0　表 15 とおなじ　A　有核

			N1		
			H0	L0	A
東員 40	N2	H0	7	8	8
		L0	9	7	8
川越 30	N2	H0	12	12	12
		L0	3	3	5
川越 20	N2	H0	22	22	20
		L0	13	4	14

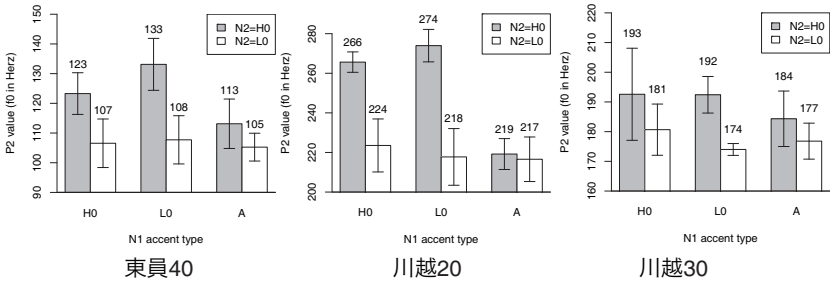

図２　実験語（N2）の f0 最高値（平均値、エラーバーは標準偏差）
先行語の音調型（H0、L0、A）でグループ化して表示．バーの色は実験語の音調型をあらわす。

起式無核のサンプル数が、とくに川越 30、川越 20 でおおくなった。このデータについて(6)の予測がどのていどあてはまるかを検討するため、基本周波数（以下、f0）の定量分析を実行した。紙幅の都合で、ここでは実験語（N2）の f0 最高値の、実験語と先行語の音調型（筆者の聴覚による分類）による変動のみを検討する。f0 値の計算には Praat（Boersma & Weening, 2015）のアルゴリズムを利用し、実験語（N2）初頭の局所的最低値に後続する f0 最高値をもとめた（図３、４参照）。表 16 のセルごとに平均値・標準偏差を算出し、図２にしめした。

東員 40（図２左）では、すべての先行語条件で、実験語の f0 最高値が高起式

無核（グレーのバー）のほうが低起式（白）よりたかい（$p<.001$）。また、両式の差が、先行語のアクセントによる下降のあと（A 条件）ではちいさくなり（$p=.04$）、低起式無核の上昇のあとでは高起式がたかいことにより、両式の差がおおきくなる（平均値の差 25Hz；$p<.001$）。具体例として、図３に各条件の平均値にちかかった高起式無核「難問」の例をしめす。先行語の音調型にかかわらず、実験語「難問」は概略おなじ f0 動態をしめすが、その実現ピッチレンジがことなる。高起式無核（H0）のばあい、先行語の内部でのゆるやかな f0 下降をひきつぎ、「難問」の f0 値もじょじょにひくい値をとる。有核（A）のばあい、先行語のアクセント核による下降でピッチレンジがひくめられるため、実験語冒頭の再上昇にもかかわらず、「難問」全体としてより低いピッチレンジで実現する。さいごに低起式無核（L0）では、この式のもつピッチの上昇性の特徴によりピッチレンジがたかめられるため、「難問」全体がいちだんたかいピッチレンジで実現する。これらの観察は、Yoshida（2011）で大阪や香川方言についてみいだした状況とおなじであり、この話者について、式の音韻論的対立が従来の典型的な特徴をもって維持されていることを示唆する。

川越 20（図２中）では、やはり式のちがいが f0 最高値の差に反映するのがみとめられ、高起式のピッチレンジがたかい（$p<.001$）。しかし、先行語が有核

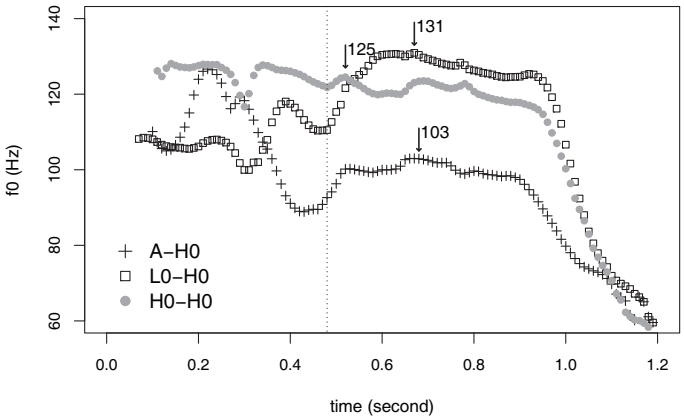

図３　東員 40 の「難問」の f0 動態。先行語は A：有核「最後の」（＋）、L0：低起式「漢字の」（□）、H0：高起式「英語の」（●）。実験語の先頭で時間をそろえてある（たての点線）。

（A 条件）のばあいその差がなくなっていることが注目される（$p=.94$）。これが式の音韻論的対立にどのような影響をあたえるかはさらに検討を要するが、東員 40 にくらべると式の対立の頑健さがひくくなっている可能性がかんがえられる。

川越 30（図２右）では、どの条件下でも両式の差がちいさい。具体例として、高起式無核「マンガ」の f0 動態を図４にしめす。図３の東員 40 とことなり、先行語が高起式無核（H0）のほうが低起式無核（L0）より、実験語がたかいピッチレンジで実現している。低起式条件（L0）の先行語は「大人の」だが、この話者では（子音 /t/ による f0 の局所的撹乱をおくと）語（文節）の後半にむかってめだった f0 の上昇がみられず、このため後続語のピッチレンジをおしあげる効果がよわいものとおもわれる。ピッチの上昇性は「上昇式」という別称の根拠ともなるこの式の重要な特徴のひとつ（中井 2011a）であり、この話者の式の音韻論的対立をささえる音声的特徴が弱いことを示唆する。この話者の式のききとりに若干まようことがあった理由はこのあたりにあるとおもわれる。いっぽう、図２でみられるとおり、この式のもうひとつの特徴である相対的に低いピッチレンジでの音声実現（郡 2012b）はたもたれている（$p<.001$）。

以上のとおり、２拍語のおおくに東京式とおなじ音調がみられ、東京式アク

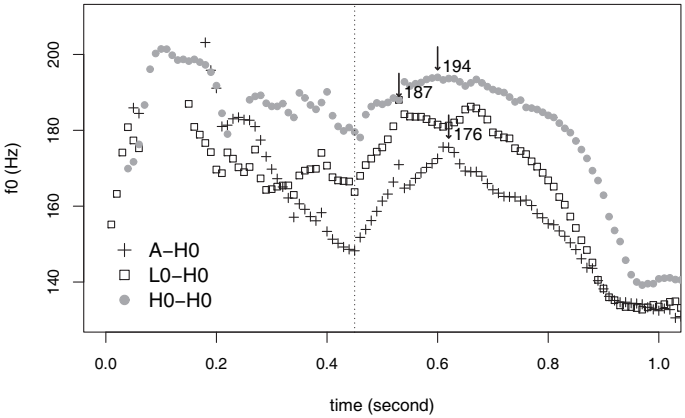

図４　川越 30 の「マンガ」の f0 動態。先行語は A「いつもの」（＋）、L0「大人の」（□）、H0「英語の」（●）。

セントの獲得がすすんでいることをうかがわせた三者について、3〜5拍語については語の音調型への所属、式の音声実現とその後続語のピッチレンジにあたえる影響のいずれの面からみても、京阪式のアクセント体系をもつとみるべきであることを確認した。２拍語と３拍以上の語のくいちがいは、東京式の獲得が語彙的・表層的なものにとどまることによるとおもわれる。いっぽう、２拍語で東京式の音調がほとんどだった川越30に、式の対立の弱化傾向がうかがえたことも、式の音韻論的対立の消失過程の解明にあたって興味ぶかい。今後さらにおおくの話者について、さまざまな角度から検討する必要がある。

5.3. 複合語アクセント（伊藤・佐藤・山田）

京阪式アクセント地域における複合名詞のアクセントは、原則として、前部要素の式によって語全体の式がきまり、後部要素の性質にによってアクセント核の有無および位置がきまることがわかっている（中井2011b）。前節までで、三重北中部地域について、大阪など近畿中央部と同様のあたらしい変化をおこしながら、京阪式アクセントが維持されていることをみた。そこで、このほかの語についてはどのていど、近畿中央のあたらしい変化と軌を一にするあたらしいうごきがみられるかさぐるため複合語アクセントを調査にくわえた。ただし、長島以東の調査地は京阪式アクセント地域ではないので、複合語の式保存については検討せず、後部要素とアクセント核の指定との関係についてのみ検討する。近畿中央部の複合語アクセントの変化については村中淑子（1999）の大阪方言アクセント調査があり、⑺のような年代差が報告されている（年代差がみられないものをふくむ）。なお「1・平板」のような音調型の併記は、両方の音調型がみられるケースである。

⑺　大阪方言複合語アクセントの年代差（村中1999：278-298）

高年層		若年層	具体例（後部要素）
プレアクセント*	～	平板型	場、版、人、病、先、料
１（後部要素１核）	～	２（後部要素２核）	プレー、マシン、スタンド
１・分離型**	～	２	マシン
１・プレアクセント	～	１	シャツ

プレアクセント　～　プレアクセント　ピン
1・平板　～　1・平板　ズボン
1・プレアクセント　～　1・プレアクセント　ショー、シャツ、ティー
*プレアクセント＝前部要素最終拍にアクセント核
**分離型＝アクセント単位がふたつに分かれているもの（ex. タイムマシン HHHLHL）

村中（1999）の調査語56語から、14語（漢語5、外来語6、混成語3）をえらび、「飛行場に行く」のように調査語を初頭においた短文を発音していただいた。時間の都合上、木曽岬50、木曽岬20、弥富50には実施していない。なお「レモン-ティー＝LHL-LL」のような音調は、抽象レベルでプレアクセントの指定があるが、前部要素の末尾音節が特殊拍（ン）のためアクセント核がひと

表17　複合名詞アクセント

0　平板型　1　後部要素1核　2　後部要素2核
p　プレアクセント　分　分離型

	東	川越		長島			木曽岬		弥富			蟹江			
	40	30	20	50	40	30	40	30	40	30	20	50	40	30	20
飛行場	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海賊版	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
就職先	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
保証人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
職業病	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
口止め料	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	0	p	p
カッターシャツ	p	p	p	p	p	1	p	1	1	p	p	p	1	1	p
ワイドショー	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p
レモンティー	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p
安全ピン	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p
ファインプレー	1	分	p	1	分	2	2	1	2	2	1	2	2	2	2
ピッチングマシン	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
半ズボン	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1
ガソリンスタンド	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

つまえの拍にずれたものととみなす。ききとり結果を表17にしめす。

本年度調査の話者は村中（1999）の若年層（30歳代以下）にあたるので、結果を大阪方言のあたらしい傾向とくらべる。まず、おおくの語が、大阪の若年層の傾向と合致した複合語アクセントをしめす。「飛行場～職業病」の平板型、「口止め料・ワイドショー・レモンティー・安全ピン」のプレアクセント、ピッチングマシン、ガソリンスタンド」の２核型がこれである。「飛行場」の東員40の「１」、「職業病」の川越30の「２」、「口止め料」の蟹江40の「０」はそれぞれひとりだけからきかれたもので、全体的な傾向ではないとかんがえ、これ以上検討しない。これとはことなる傾向は、まず「半ズボン」の「１」で、14/15人にみられた。村中（1999：297）の大阪では平板が優勢で、「１」が若干みられるが、標準語アクセント（秋永一枝・編2014）とおなじであり、この語もふくめ、全体的に近畿主流のあたらしい傾向というより、共通語アクセントにしたがっているとみられる。漢語、外来語がおおい調査語の性格（使用域）をかんがえれば、自然な結果かもしれない。いっぽう標準語アクセントともことなる傾向として、「カッターシャツ」のプレアクセント（LHHL-LL）が目をひく。三重～愛知両方で10/15人にみられるが、共通語アクセントの「１」とは異なる。村中（1999）によれば大阪ではむしろ高年層にみられる型だが、この地域では、若年層にかけて有力な音調型になっているとおもわれる。中井（2002）では京都でプレアクセント（高起式４核）がやや優勢であり、このような傾向を反映しているのかもしれない。さいごに、「ファインプレー」の「１」型。大阪は若年層にむけて「２」型がふえており、標準語アクセントも「２」だが、この「１」型は、後部要素が３拍の複合名詞のもっとも生産的なアクセントである「－３」型（中井2011b：172）があらわれたものとおもわれる。中井（2002）の京都でも１型が優勢である。

６．まとめと課題

本稿は、三重・愛知の県境付近における両地域の方言の接触について検討した。岐阜や愛知の方言事象が三重に受容されたとおもわれるケース（カンド、断定のダ、文末詞ガー）がみられたいっぽうで、三重の事象が愛知に伝わった

とおもわれるケース（否定のヤン、確認・報告のヤンカ）もみられた。ふたつの方言圏の、隣接する地域にあたえる影響は双方向的であり、かならずしも愛知が圧倒してはいないようである。弥富市の人口動態資料（平成 26 年度住民基本台帳人口移動報告）によれば、弥富市には名古屋市から 320 人が転居しているのにたいして、三重県からも 253 人が転居しており、人の移動はあるていど双方向的である。このような人のうごきも、ことばの影響の方向をきめる要因のひとつであろう。関東や関西でも指摘されてきたとおり（井上 1998、日高水穂 2014）、東海地域でも経済などの中心地にむかって方言事象が伝播することもあることをしめす事例だとかんがえられる。なお、愛知の言語事象が三重にはまったくとどいていないものもあった（そうなんやて / だって（調査したが未報告）、指令台）。

いっぽう、アクセントの共通語化が三重側にみられ、これには愛知の影響も貢献しているとおもわれるが、これにたいして、三重の京阪式アクセントは愛知側にまったく影響をおよぼしていない。これは、共通語アクセントの勢力のつよさにくわえて、音韻のような体系的な言語事象については、単純なものを習得するとより複雑なものを習得するのはむずかしい（井上 1977：112）ことにもよるとおもわれる。同様に、確認・報告のヤンカも、愛知でも耳にすることはあるものの、区別の体系が習得されるにはいたっていなかった。このように性質・出自のことなる多様な方言事象が共存し、ときに融合する場所として、三重・愛知県境は方言研究にとってひじょうに興味ぶかいフィールドだとおもわれる。現時点では地域、年齢層のいずれも不十分であり、今後は近隣の地域に継続的に調査を実施したい。また、候補語を精選する、文脈の設定を適切にするなどの改善をほどこし、ここまでの暫定的結論を確認・修正する必要がある。

謝辞　言語調査にご協力くださった各市町のみなさん、質問紙調査にご協力くださったみなさんに心よりお礼申し上げます。また、岸江信介氏、村田真美氏、竹内はるか氏、弥富市学校教育課・秘書企画課のみなさまに文献・資料のご提供をたまわりました。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」予算および、文部科学省科学研究費助成金（「日本語諸方言のプロソディーとプロソ

ディー体系の類型」研究代表者：窪薗晴夫、課題番号 26244022）による助成を受けています。

参考文献

秋永一枝（2014 編）『新明解日本語アクセント辞典 第２版』三省堂

安藤智子（2015）「ちょっともおぼわらん(3)」「多治見弁 blog」（URL:http://blog.livedoor.jp/tajimiben/）2015 年 5 月 22 日記事

井上史雄（1977）「方言の分布と変遷」『岩波講座日本語 10 方言』岩波書店（pp. 83-128）

井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波書店

太田有多子（2013）「紀伊半島沿岸部における打消表現」岸江信介（他編）『都市と周縁のことば―紀伊半島沿岸グロットグラム』和泉書院（pp. 63-90）

鏡味明克（2003）「三重県」『月刊言語』32(1)：76-77

加藤正信（1977）「方言区画論」『岩波講座日本語 10 方言』岩波書店（pp. 41-82）

岸江信介・村田真美（2012）「京阪式アクセントにおける２拍名詞の類の統合状況と低起式無核型の消失傾向―大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に―」『音声研究』16(3)：34-46

郡史郎（2011）「大阪市方言若年層の二拍名詞４類・５類のアクセントについての一考察」杉藤美代子（編）『音声文法』くろしお出版（pp. 229-250）

郡史郎（2012a）「京阪式アクセントの特性と動向」『音声研究』16(3)：28-33.

郡史郎（2012b）「現代大阪市方言における低起式アクセントの特徴」『音声研究』16(3)：59-78.

国立国語研究所（1989）『方言文法全国地図　第１集―助詞編―』財務省印刷局

国立国語研究所（1991）『方言文法全国地図　第２集―活用編(1)―』財務省印刷局

佐藤亮一（2009）『都道府県別全国方言辞典』三省堂

佐藤虎男（1990）「大阪弁の文末詞ヤンカについて」『学大国文』33：1-25.

真田信治（1987）「ことばの変化のダイナミズム―関西圏における neo-dialect について」『言語生活』429：26-32.

清水未希（2015）「打消表現“ヤン”の使用範囲と意識」愛知淑徳大学文学部・卒業論文

柴田彩花（2015）「愛知・岐阜・三重の気づかれにくい方言」愛知淑徳大学文学部・卒業論文

高木千恵（2006）『関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相』『阪大日本語研究』別冊２

高橋顕志（2008）「接触変化から見た方言の形成」小林隆（編）『シリーズ方言学１　方言

の形成』岩波書店　3章
竹内はるか（2015）「三重県鈴鹿市のアクセントの研究」『国学院大学大学院紀要』46：129-151.
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
鳥谷善史（2015）「関西若年層の新しい否定形式「～ヤン」をめぐって」『国立国語研究所論集』9：159-176.
中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』勉誠出版
中井幸比古（2011a）「声調のある方言」松森晶子・他編　8章
中井幸比古（2011b）「複合語のアクセント(2)」松森晶子・他編　11章
日高水穂（2014）「近畿地方の方言形成のダイナミズム　寄せては返す「波」の伝播」小林隆（編）『柳田方言学の現代的意義―あいさつ表現と方言形成論』ひつじ書房（pp. 245-264）
松森晶子・他（2011編）『日本語アクセント入門』三省堂
村中淑子（1999）「大阪方言における複合名詞アクセントの実態について」『言語文化研究』（徳島大学）6：277-298.
山田敏弘（2007）「岐阜・愛知の若年層方言について1―遊びのことば・学校のことば・オノマトペ―」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』56(1)：11-41.
吉田健二・勝田亜弓・苅谷美沙希・川北梓・小島愛加・柴田彩花・清水未希・松尾江利子・若園篤・渡邉彩・渡邉千裕（2015）「三重県北・中部方言の現状：予備調査報告」『愛知淑徳大学国語国文』38：124-150.
Boersma, Paul & Weenink, David (2015). Pratt: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 5.4.09, retrieved 1 June 2015 from http://www.praat.org/
Pierrehumbert, Janet & Beckman, Mary. (1988). *Japanese Tone Structure*. MIT Press.
Yoshida, Kenji. (2011). Phonetic evidence for the three phonological pitch levels in Japanese dialects. *International Conference on Phonology and Phonetics* 2011 (NINJAL ICPP 2011), Kyoto. における口頭発表資料

（吉田健二：本学非常勤講師、赤塚奈津美・伊藤圭佑・黄地まどか・大西恵梨・大橋里帆・國本悠生・暮石朱夏・佐藤汐里・鈴村花澄・園田聖・高屋真悠子・武川奈美・中西恭介・山田晃平：文学部国文学科3年生）